

## 第1分科会レポート



結核予防会  
徳島県支部常務理事  
相良安信



## 21世紀の結核対策への提言

大会第1日目の第1分科会は、「21世紀の結核対策への提言」をテーマに約300人の参加者の下に行われました。

シンポジウムは、結核研究所の石川信克副所長を座長として5名の演者の発表と、厚生労働省健康局結核感染症課中谷比呂樹課長、結核予防会第一健康相談所増山英則診療部長の助言により進められました。

「徳島県の結核の現状と課題～結核対策パッケージによる対策強化～」

徳島県穴吹保健所石本寛子所長は、徳島県の結核の特徴を検討し、定期外検診の重要性を示され「定期外健康診断実施の手引き」を作成し、その目標値に基づいた毎年の評価を行うこと、また結核研究所森亨所長考案の「結核対策パッケージ」を基に、今後の徳島県の結核対策の方向性を検討し目標を設定することなどにより、結核罹患状況の改善に努めたいと報告された。

「発見患者における課題～発見の遅れ、高危険群～」

国立療養所岐阜病院呼吸器科加藤達雄医長は、現在の結核罹患率の上昇は、高齢者の再発症の増加、社会的弱者間での蔓延が大きな要因と考えられるとし、特に、高齢者肺結核の臨床的特徴、患者発見での問題点を検討された。その結果、特に高齢者の肺結核は診断が遅れる傾向が見られ、広く医療従事者に結核についての知識を啓発する必要性、結核診療の専門家と一般の医師との連携の重要性を指摘された。

「結核の危機管理～集団感染事例の分析より～」

高知市保健所地域保健課結核感染症対策室楠瀬美枝室長は、高知市中学校で発生した結核集団感染事例の体験を基に、健康危機管理の視点から報告された。集

団感染発生時に最も大切なことは、初発患者の人権やプライバシーへの配慮、二次感染の防止及び早期発見であるが、特に緊急時の危機管理ではマスク、保護者、関連医療機関、一般市民への対応の重要性、治療や予防内服の対象になった人への精神的なケアの必要性を報告された。

「医療機関と保健所との連携の試み」

神奈川県秦野保健所原田久主査は、神奈川県結核患者管理促進事業の一つの柱である「結核治療中断・継続困難者早期把握支援システム」について症例を示しながら報告された。このシステムによる患者管理は、本来は保健所業務の範囲内であるが、医療機関との連携により早期に治療中断者を把握でき、保健所では、問題となる患者に対し重点的、効率的に保健指導が行えるようになったと述べられた。

「新しい対策の試み」

大阪市保健所撫井賀代保健副主幹は、従来の治療終了後の管理検診に重点をおいた患者管理ではなく、脱落中断を防止し、治療終了に導くための服薬支援を中心とした患者管理の必要性の下での「DOTS」の試行、患者管理のあり方を定期的に評価し、結核対策の見直しを目的とした「コホート検討会」の開催などにより、患者本人や医療機関との連絡が密になり治療成績の改善が認められたと報告された。

結核予防法の施行から50年、21世紀のはじめに行われたこの分科会は、今後の結核対策に多くの提言が示され、大変有意義なものとなった。